

日本の自然は北海道に、北海道の自然は道北、道東に、まだ割合よく保存されている。しかし、そこへもおそかれ早かれ人工が押し寄せていくであろう。したがって自然保護の手を早く打つ一方、いまある姿を正確な記録にとどめておくことには、それなりの意義があろうかと思われる。

筆者は昭和四十一年

(一九六六)年三月

二十〜二十五日の間に根室港、花咲港、

温根沼、風蓮湖、尾

岱沼および湊沸湖を

訪れて、表に示す十

三科三十七種の鳥が

いるのを観察した。

そのうち、生態や分

布の面から注目し値

するもの二、三につ

き、所感を述べてお

きたい。

*オオハクチョウ

今回の観察旅行の

おもな目的の一つは

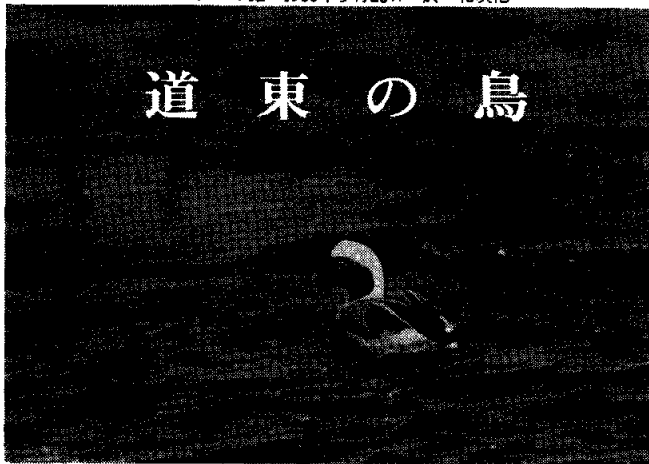
風蓮湖、温根沼でオ

オオハクチョウの生態

を調べることにあつ

たが、三月二十一日、

コオリガモの雄 1966年3月20日 於・花咲港



阿 部 学

二十二日に風蓮湖はまだ一面の氷に閉ざされ、パスのとまる「別当賀川口」付近にわずか一条の氷の割れ目が見られるに過ぎなかった。地元の人々の話では三月十九日まではわずかながらハクチョウの姿を見かけたが、翌二十日解禁になったアサリの漁に出る漁船のエンジンの響きに驚いて飛び去つ

たとい、当日は一羽のハクチョウも見られなかった。

そこから数キロ根室寄りである温根沼には、風蓮湖から飛来したと思われるオオハクチョウが三〇〇羽ほど沼の奥に広がった水面に、オナガガモ、ヒドリガモ、ウミアイサ、ホオジロガモ、ヨシガモなど、合計一、〇〇〇羽ほどのものといっしょに浮かんでいた。

二月十三、十四日に春別川の河口を訪れたときは、一万羽に近いオオハクチョウが群れていたが、三月二十二日にはそれが一羽も観察されなかった。しかしこの日はマガモ、ヒドリガモ、ウミアイサ、ホオジロガモ、オナガガモ、キンクロハジロなど合わせて六〇〜七〇羽を見た。二月十三、十四日には、これらのうちヒドリガモ、オナガガモなどは見られなかったから、おそらく本州からシベリアへ帰る途中、ここへ寄つたのであろう。

三月二十二日、尾岱沼の市街から約二km北では、野付岬に囲まれた湾内の水原の真中に細長く氷のとけた潮切りがあつて、そこにオオハクチョウが五〇〇羽内外休んでいた。

翌三月二十三日、湊沸湖はまだ一面の氷に閉ざされ、湖上を馬そりが走るほどであったが、原生花園の付近には細長い潮切り

が生じ、そこに十数羽のオオハクチョウが四〜五羽ずつ集まって浮かんでいた。湖の網走寄りである湊沸湖の前の給餌場には、オオハクチョウ(約三五〇羽)、ヒドリガモ、ヨシガモ、マガモ、ホシハジロなどが多数集まっていた。湊沸湖へ本格的にハクチョウの飛来するのは例年四月上旬であるという。なお、今回の旅行中観察されたのは、すべてオオハクチョウでハクチョウは一羽も見られなかった。

*その他の鳥類

三月二十一日、風蓮湖南岸でムクドリが一羽観察された。これは北海道および本州北部では夏鳥とされている(日本鳥学会、一九五八)のであるが、札幌近郊をはじめ道内各地で筆者が観察したところによると北海道で繁殖したものの一部分は南へ渡らず、道内のいろいろな土地に留まること明らかである。真冬から早春にかけて札幌近郊のごみ捨場などには、すすで真っ黒に汚れたムクドリの群れをときどき見かけるが、これらも遠く本州方面から渡って来たのでなく、札幌市付近で越冬したものである。今回、道東の風蓮湖付近でも、その越冬が確認されたことになる。

花咲、風蓮、温根沼で見たベニヒワは、本道では冬鳥で、原野の雪の上に頭を出しているエゾヨモギやアカザなどの枯枝に群

科・種名		観 察 日 1966年 3月							
		20日	21日	21、22日	22~24日	24、25日	25日		
		花咲港	根室港	風速湖 温根沼	尾岱沼	斜 里	涛沸湖		
カ	ラ	ス	多	多	多	多	多	多	多
			多	多	多	多	多	多	多
ム	ク	ド	リ			1			3*
キ	ン	バ	ラ	多	多	少	多	多	
ア	ト	リ	ベ	5		10			
			ニ			10			
			マ			1			
			ア	1					
ヒ	バ	リ	ヒ			1			
セ	キ	レイ	ハ						1*
ヒ	ヨ	ドリ	ヒ					3	
ツ	グ	ミ	ツ			5			
ワ	ン	タ	カ	1		1	1	3	3
			オ			1			4
			オ		1	2			1
			オ						
			オ						
			オ			300	500		400*
			オ			5	5		多
			ヨ			6	3		5
			ヒ			30	5		多
			オ			30	3		多
			オ						10*
			オ			30	20		少
			キ				4		
			コ			150	30		
			ク			10			
			ビ			5			
			ミ						
			ウ				50	10	3
			カ						
			ウ				7	1	
			チ				10	7	
			ウ						
			ヒ						
			メ						
			ウ						
			シ						
			マ						
			ウ						
			シ						
			ロ						
			カ						
			モ						
			メ						
			ウ						
			シ						
			ロ						
			カ						
			モ						
			メ						
			ウ						
			ミ						
			ケ						
			ウ						
			ミ						
			ス						
			ズ						
			メ						

数字は羽数を示し、多は羽数の多いこと、少は羽数が少ないことを示す。

*印は松木勝彦氏観察。

れ採食していた。ことしは札幌近郊をはじめ、道内各地で二〇〇〜三〇〇羽の群れが観察されており、例年より多いように思われる。

オジロワシは根室港、温根沼、涛沸湖でそれぞれ別個体と思われる七羽が観察される。

たことから、知床半島を中心にオホーツク海沿岸、根室海峡には相当数生息しているものと思われる。

クロガモなどといっしょに冬期間ずっと生息しているようである。涛沸湖へは、カモ類もまだ本格的に渡来してはいなかった。四月上旬にはオオハクチョウとともにその数が急速に増すことであろう。

羽に変わりはじめていた。

一九六六年三月三十日

(北大農学部応用動物学教室)

九六五) の大英博 物館所蔵 の、函館 産二個体 (日本鳥 学会、一 九五八) がかしわ が国では 記録され ていない が、筆者 は冬期、 小樽、釧 路、根室 などし ばしば観 察してお り、今回 も風連湖 から尾岱 沼までの